国語科研究主題

# 言語感覚を働かせ，論理的に考える力の育成

## ～問いを生み出し，考えを深める学びを通して～

平井　規夫　　冨髙　勇樹　　樋川　千晶

## １．主題設定の理由

【これまでの研究から】

2014年度から2016年度まで，本校国語科では「協働的な探究を促す授業の創造　～自分の考えを再構成する力の育成をめざして～」を研究主題に設定し研究を行ってきた。この研究主題はそれまで本校国語科で積み上げてきた研究と密接に関わっており，「自分の考えを再構成する力」の育成に取り組んできたものである。

昨年度までの研究を振り返ると，まず生徒が自分自身で考えたことを絶対化しないで，考え直すことの難しさからはじまる。生徒は課題に直面したときに，試行錯誤しながら自分なりの解答や表現を導き出したり，理解の状態に達したりする。その一応の解決に満足し，その解答や表現，理解の状態をより高次なものとしていこうとすることは難しい。そこで，新たな発見や疑問が生じることで「自分の考え」をもう一度考え直すことにつながると考えた。その際，「協働」と「探究」という２つの要素が生徒のさらなる考えの深まりに必要であると考え研究してきた。「協働」について，高垣（2010）では以下のように述べている。

鹿毛雅治は「協働」という語について，『一人ひとりの異質性（他者性）に基づいた対話的コミュニケーションによる多様な学びの成立について強調したいので，「共同」や「協同」ではなく，あえて「協働」の語を用いた。』としている。本研究でも他者を価値観や考えを異にする人と捉え，他者との対話による学びの深化を目指すため，鹿毛に倣い，「協働」という語を用いた。

本校国語科では，先述したように異なる考えをもつ様々な人とのやり取りの中から新たな考えを主体的に生むことの必要性について考えている。そこには他者との対話的コミュニケーションは必要不可欠なものであり，多様性に気づく中で自分自身の考えを深めるための要素として「協働」が必要であると考え研究を進めてきた。

昨年度までの全体研究主題が「深く考える授業の創造」であり，その深く考える授業に必要なものとして「視点を変える活動」を設定した。具体的な「視点を変える活動」の中身として，仲間との関わり，資料提示や学習課題など教師の働きかけ，振り返りなどが挙げられる。本校国語科においては「対話」と「振り返り」の２つの観点から「協働」的な「探究」を促す授業の創造に取り組んできた。「対話」を促すために，自分の考えたことを他者に積極的に発信できる，様々な交流形態を取り入れた。また，「振り返り」については，学習感想のような学習後の場面だけでなく，学習過程の中で振り返ることができるよう，考えの可視化ができるな記録（ノート指導，初読の感想と学習後の感想を並べる記述，ポートフォリオ等）を取り入れた。

授業実践に取り組む中で，「話す」「聞く」「書く」「読む」これらのどの領域においても，国語科で養ってきた見方や考え方を使いながら，他者との対話を通して，「自分なりの結論」を吟味したり，改善したり，発展させ，より深く考えることへつなげることにつながっていくという成果が表れた。一方で，次の学習への意欲や交流活動における他者への寛容な態度，学習で身につけた力が今後どのような形で使うことができるかという点について可視化の難しい点も課題として挙げられた。

【言語感覚を働かせる】

2017年６月に文部科学省から発表された「次期学習指導要領解説（国語科）」（以下　解説）において，教科の目標が以下のように示されている。

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

⑴　社会生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
⑵　社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。
⑶　言葉がもつ価値を認識するとともに，言語感覚を豊かにし，我が国の言語文化に関わり，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

（下線部は本校国語科によるもの）

解説の中では，国語において育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし，国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

また，答申別紙において言語能力を構成する資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理したものとして，以下のように示している。

（知識・技能）
言葉の働きや役割に関する理解，言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け，言葉の使い方に関する理解と使い分け，言語文化に関する理解，既有知識（教科に関する知識，　一般常識，社会的規範等）に関する理解が挙げられる。
特に，「言葉の働きや役割に関する理解」は，自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり，言語能力を向上する上で重要な要素である。

（思考力・判断力・表現力等）
テクスト（情報）を理解したり，文章や発話により表現したりするための力として，　情報を多面的・多角的に精査し構造化する力，言葉によって感じたり想像したりする力，　感情や想像を言葉にする力，言葉を通じて伝え合う力，構成・表現形式を評価する力，考えを形成し深める力が挙げられる。

（学びに向かう力・人間性等）
言葉を通じて，社会や文化を創造しようとする態度，自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度，集団としての考えを発展・深化させようとする態度，心を豊かにしようとする態度，自己や他者を尊重しようとする態度，自分の感情をコントロールして学びに向かう態度，言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

そして，言語能力を構成する資質・能力が働く過程として，①テクスト（情報）を理解するための力が「認識から思考へ」という過程の中で，②文章や発話により表現するための力が「思考から表現へ」という過程の中で働いている。これらの「認識」から「思考」を経て「表現」へという学習の過程は，決して一方向的だけでなく，双方向的に働くことで言語能力の資質・能力を高めることへとつながるものと考えられる。

解説に示されている国語科の目標を概観すると，全学年の目標に「社会生活」という言葉が示されている。その中で，第１学年の目標では「日常生活」という言葉が挙げられている。これは小学校国語科で学んできたことを基に，系統的に学習がつながっていることが示唆されている。加えて，小学校中学校で育成されたことが高等学校の国語科の基礎となる。中学校段階においては，生徒は「社会生活」を見据えながら，様々な事象や課題に向き合い，それらを言葉を通して理解し，解決していくことができる力が求められていると考えることができる。

生徒が，①「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識及び技能」）②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」）③「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」）を常に意識できるような言語活動や学習課題の設定が，資質・能力の向上につながるものであると考える。そこには教科を学ぶ本質的な意義の中核として「見方・考え方」を自由に働かせることができることも併せて必要なものとなる。

生徒はもちろん私たちは言葉により，互いの考えや意志，感情を伝え合うことで思考や認識を再構成し確かなものとしている。現代の情報化社会において，情報の中で主要な要素を占めている言葉の役割は今後一層大きなものとなっていくと考えられる。そこで，言葉を正確に理解し，適切で効果的な表現を行うことのできる力の育成が必要となる。知識・技能の習得に加えて，他者との対話やそこに互いの生きた考えを交差させるこ

とのできる言語感覚を養い豊かにすることが自分の考えをさらに深めることや課題を解決するための力となる。生徒自身が言葉と意識的に関わりながら，自他の考えを吟味したり評価したりする感覚を養う活動がそれらの力の育成につながると考える。そこで，「言語感覚を働かせる」ことを研究主題として取り入れた。

【論理的に考える】

新学習指導要領の改訂に向けて，現在またこれから誕生する子供が生きていく未来について「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月）（以下　答申）では「2030年の社会と子供たちの未来は情報化やグローバル化といった社会的変化が，人間の予測を超えて加速度的に進展するようになってきている。進化した人工知能が様々な判断を行ったり，身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が，社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされている。」と述べている。今日の社会においても，グローバル社会，高度情報社会など様々な捉え方で表現はされているが，それらの共通項を挙げるとすれば，「自分と価値観や考えを異にする人々がいる。そして，そのような人々と共に生きていかなければならない。」ということであろう。また，「人間の予測を超えて加速度的に進展する」ことを考えると，正解や完成された社会というものはなく，異なる考えをもつ一人ひとりが互いに納得し合う中で，より良い社会を創っていくことがこの先の社会の在り方と考えることもできる。

上記のような社会を生きていくうえで，子供たちの現状がどのようなものであるか。答申において「子供たちの現状と課題」として以下のような点が挙げられている。

| |
|---|
| ・判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べることなどについては課題が指摘されている。<br>・学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら，自らの能力を引き出し，学習したことを生活や社会の中の課題解決に生かしていくという面には課題がある。<br>（下線部は本校国語科によるもの） |

これからの社会を生きていく子供たちには，異なる考えをもつ様々な人が知識やアイデアを出し合い，共有しながら，完璧ではなくても答えや新たな知識を創りだし，さらに導き出した答えや知識から新たな課題を見つけ，答えや知識を見直していくこと。また，そのような資質・能力を予測困難とされる社会生活でも使えるものとして身につけていくことが必要であると考えられる。そのような資質・能力をもとに子供たち一人ひとりが，予測できない変化に受け身で対処するのではなく，主体的に向き合って関わり合い，その過程を通して，自らの可能性を発揮し，よりよい社会と幸福な人生の創り手となることが重要とされている。

他者との関わりを通して，答えや新たな知識を創り出す上で，了解不能の他者とどのように互いの考えを響き合わせるかが問題となる。互いの考えや意見を納得，譲歩するには相手意識をもち適切に表現すること，また批判的な思考をもって理解していくことが求められる。これは答申における「子どもたちの現状と課題」とも一致するところである。そこで，生徒自身が自分自身の考えを述べる際，判断の根拠や理由を明確にすることを学習活動に積極的に取り入れることができる力の育成を目指し，研究主題として取り入れた。

## ２．全体研究とのかかわり

今年度から「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～」を全体研究の主題とし，３年間の研究を行う。初年度は新学習指導要領への意向を見据え，「教科の見方・考え方を生かした学び」について各教科で研究を進める。

（１）国語科における「見方・考え方」について

答申では教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージとして次のように示している。

| | |
|---|---|
| 言葉による見方・考え方 | 自分の思いや考えを深めるため，対象と言葉，言葉と言葉の関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉え，その関係性を問い直して意味付けること。 |

一般社会における国語科において育成する必要があるとされる能力として，物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング」）や情報活用能力，質問する力，メモを取る力，要約する力などが言及されることがある。国語において育成が必要とされるこのような能力は，小学校からの系統

的な学習により育まれていく力ではあるが，どの段階においても「言葉がどのように働くのか」「言葉がどのような役割を果たしているのか」ということを意識した学習の積み重ねが必要である。

また，学習における言語活動の充実という点について，これまでの本校国語科における研究においても視点をあて積み重ねてきた。その中で言語能力を身に付けるために適切な課題であるか，また生徒の実態に即した内容であるかという点について吟味を重ねてきた。生徒が知識・技能を習得し，言葉による見方・考え方をより明確に働かせるため，「生徒の実態に即した学習課題の設定」や「言語活動の工夫」をさらに推し進めることが必要と考える。

（２）国語科で目指す生徒の姿と「見方・考え方」を働かせた学び

新学習指導要領改訂の審議の中で，「見方・考え方」を働かせた学習を行い，資質・能力を育てるという内容はどの教科においても明言されている。答申では，「習得・活用・探究」という学びの過程の中で「見方・考え方」を働かせることを通じて，資質・能力がさらに伸ばされたり，新たな資質・能力が育まれたりすることにより，「見方・考え方」はさらに豊かなものになるという相互の関係にあるとしている。また，解説では「言葉による見方・考え方を働かせる」について，以下のように示している。

> 生徒が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目してとらえたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては，言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。
>
> （下線部は本校国語科によるもの）

他者との対話を通し，言語感覚を働かせ，自ら問いを生み出し解決に向かう「知的に自立する」ことができる生徒を目指してこれまでも研究を重ねてきた。その際，国語科では生徒自らが言葉を通して自分の考えを外化したり，他の考えに触れることで内化することで自分の考えをより深め，広げる過程が思考・判断・表現する力を身に付ける上で必要なことと捉えている。常に課題意識をもち学習に取り組むことで，学びへの主体性を養うことにもつながる。

「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象と」する国語科では，言葉と意識的に生徒が関わりながら学習課題を解決することで，生徒が自らの考えの変容に気付き明確になることで学びの有用性を認識することが可能となる。また他者との関わりが自分の考えにどのような影響を与えているのかということにも意識を向けることで，考えの異なる他者を受け入れる寛容な心の育成にもつながると考える。そのためには，適切な学習課題と言語活動の工夫が必要となる。教師主導から生徒主導の授業形態とすることで，生徒が主体的に課題を解決し，その際「言葉による見方・考え方」をより意識的に働かせることにつながると考える。

## ３．研究内容

研究初年度は，生徒が「見方・考え方」を意識的に働かせる学習とはどのような授業であるかという点について研究を行う。昨年度までの国語科での研究をベースとし，生徒の「見方・考え方」を意識的に働かせる場面をどのように取り入れるか。また，それは生徒が言語感覚を働かせて自分の考えを深めたり広げることにつながるのかという点において検証していく。そこで問いを生み出し，考えを深める授業の在り方についても言及していきたい。

２年目からは，問いを生み出し，考えを深める授業の中で「見方・考え方」を意識的に働かせることにより，国語科で育むべき資質・能力がどのように育ち，どのようにそれを見とるのかという点について研究を重ねていく。

以下はこれから国語科で取り組む研究内容の具体である。

（１）協働的な探究を促す言語活動，学習課題の設定

ここで言う「協働」とは「対話」という活動を意識していきたい。本校ではこれまでも「交流」を意識した学習を展開し，その有用性は生徒も教師も実感している。ただ，課題の設定にも問題があるが，ただの意見発表で終わってしまったり，深みや広がりをもった交流にまでたどり着けなかったりする場面も多く見受けられ

る。そこで，教師が「対話」という視点から交流活動を見直すことで，より効果的な交流のあり方に迫っていきたい。「対話」とはどのような行為であるか，いくつかの文献を参考にしてみる。

会話との違いは，会話が親しいもの同士のおしゃべりであるのに対して，対話は初めての人との情報交流や親しい者との間であっても，それが成されることによって，新しい価値の共有や意味の生成が行われるところにある。そのような対話能力を育成するためには，相手との矛盾や葛藤が生じるような切実な対話体験が必要となる。

（田近洵一・井上尚美　編　「国語教育指導用語辞典　第四版」教育出版　p162）

対話を中心とした授業過程は，①異なる考えとの出合い，②教え・学び合う，③主体性・協働性，④知的対立・葛藤⑤よどみ，迷い，⑥自己省察，⑦探求（意味・真実性の追求），というキーワードに代表されるように，新たな知が創出される創造の泉であり，「自分の知識や考えの狭さや思考の限界や誤りに気づく」「他者の考え方のおもしろさやすばらしさに感動を覚える」などメタ認知的な気づきが生じやすい。
（高垣マユミ　編著「授業デザインの最前線Ⅱ　理論と実践を創造する知のプロセス」北大路書房p67，68）

子どもは，「ひとり読み」の段階で「書き込み・書き出し」しておいた自分の意見を話合いの場に提出することによって，客観的・相対化することができる。そしてこういう訓練を受けていけば，やがては自分の内部の他者（自分を見つめるもう一人の自分）との対話（メタ認知）が可能になるのである。結局，子どもは二つの他者との対話を通して，自力読みのできる・自立した読者になる。

○　ａ自己の内部の他者（もう一人の自分）との対話。
○　ｂ自己の外の他者（クラス仲間）との話合い・討論

（井上尚美　著「思考力育成への方略」明治図書p245）

これらの文献を参考にすると，課題の設定の１つの観点として，「矛盾や葛藤が生じる」や「知的対立・葛藤，よどみ，迷い」などが見えてくる。その矛盾や知的対立・葛藤の中から，生徒が思考・判断して新たな価値や考えを再構成していくことができる。生徒の実態や指導事項，言語活動との関連を踏まえながら，実際の授業での具体化に取り組んでいく。このような考えに立って研究を進めていくのであるが，果たして，他者と出会うことは可能なのであろうか。田近の言葉の中で，「他者と出会い」「異質なる他者との出会い」と使い分けをしている。その言葉には他者と出会うことは極めて困難であるということが込められているのではなかろうか。しかし，国語科では，その難しいことを通して，自分の考えを再構成していくことに国語科教育の学びがあるのではないかと考える。そこで，本校国語科では「他者との対話」を「自分とは異なるものの見方や考え方と出会う」こととととらえる。また，実際の授業に即して考えた場合，いくつかの場面が挙げられる。

１．指導者と教材の対話　＝　教材研究
２．生徒と教材の対話　＝　生徒の気づき，自分の考えの形成
３．生徒同士の対話　＝　交流，自分の考えの再構成
４．指導者と生徒の対話　＝　単元を通しての指導

上記のような対話を，単元を通して，また，授業に意図的に取り入れていく。

（２）学習課題に対し「見通し」と「振り返り」を位置づけた学習過程

「見通し」と「振り返り」を意識的に学習過程に位置づけていくことで自分の思考の変容を，生徒一人ひとりに意識化させる。生徒が，その振り返りの場面を可視化（１枚ポートフォリオやノート作りなど）しながら，自分の思考の変容をとらえることでメタ認知的思考を身につけていけるようにしたい。

１．自分の考えを形成する場面
　学習課題に対して，既習事項や自分の経験を振り返って，自分の考えを形成する。
２．対話する場面
　自分の考えの過程を振り返って，他者に説明する。
３．自分の考えを再構成する場面
　対話の過程を振り返って，自分の考えを再構成する。
４．学習活動全体を自己評価する場面
　学習全体を振り返って，自分にどのような力が身に付いたか，新たな発見（きっかけも含めて），変容，新たな課題などを自己評価する。

また，本校国語科では「協働」（＝対話的コミュニケーション）を単元の中に設定しているが，対話の場面において，自分の考えの変容のきっかけや他者の発言を意識させながら「振り返り」を行うことをめざしてきた。それにより，「協働」の有用性を経験し，次の学習への意欲，他者への寛容な態度の育成へとつなげていきたいと考えたからである。実際に生徒は，ワークシートへの記述や１枚ポートフォリオへの記述を毎時間行っている。その記述を見ると，ワールド・カフェ形式の交流によって，これまでになかったキーワードを用いて，自分の考えをまとめ直していることから「協働」が効果的に機能し，生徒の理解を深めたと思われる。その中で，昨年度までの研究の課題として「協働」の有用性，次の学習への意欲，他者への寛容な態度などは可視化するのが難しいものであるため，教師にもわかりにくく，十分な検証ができていないのは課題である。生徒の思考の流れや考えの変容のきっかけを意識させる「振り返り」をこれからも継続して位置づけることで，生徒は「協働」の有用性や他者への寛容な態度へとつながるのではないかと思う。そのような学習の積み重ねが本校国語科で目指す生徒の姿へ近づいていくと考える。

（３）学習過程を明確にした指導計画

これまでの国語科の研究において，生徒自身がどのように文章を読み解いているのかということを意識することは，読解の方法を自分の力として身に付けることになることを検証してきた。自分自身の解決の方法を知っていることで，新たな課題と向き合ったとき，これまで身に付けた方法で理解をしようとするだろうし，逆に自分が身に付けていないアプローチで文章に触れようとする新しい方法に向かおうとする意欲を喚起することになると考える。有元（2010）は，読解のためのストラテジーとして以下の７点を挙げている。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○ | 背景 | バックグラウンド・ナリッジ | … 教材理解に必要な予備知識や基礎知識を確認する |
| ○ | 理解 | 正確な理解 | … 内容を正確に理解できているか確認する |
| ○ | 予測 | 原因から結果の推論 | … 次にどうなるか予測する |
| ○ | 解釈 | 結果から原因の推論 | … 登場人物の行動や作者の表現について「なぜ」と問う |
| ○ | 評価 | クリティカル・リーディング | … 登場人物の行動や作者の表現や結末を評価・批判する |
| ○ | 個人 | パーソナル・リーディング | … 自分だったらどうすると考える |
| ○ | 創造 | クリエイティブ・リーディング | … 続き話を考えたり他の解決方法を創作したりする |

上記は読解の事例となるが，どの領域や単元においても生徒が課題解決に向けた自分自身の既有知識を掘り起こすことのできる学習過程を計画する必要がある。学習において，「見通し」をもつことで，何を目的にどのような観点から学習しているかということを生徒が意識することにつながると考える。また，生徒自身の課題解決に向けた既有知識，いわゆるスキーマが働く仕掛けを教師が意図的に仕組むことで，課題の解決や生徒自身の考えの深化につながると考える。

## ４．研究を支える取り組み

（１）単元構想表

これまで本校国語科においては「単元構想表」を基に指導計画を立ててきた。「単元構想表」を用いることにより活動の流れが明確になるとともに，課題をどの段階で，どのような流れで設定していくことが望ましいのかについて考えることができる。また生徒にどのような知識・技能を指導し，それらをどのように活用させていくかという流れを見とることに有効であるため，指導計画を立案する際に活用していきたい。

（２）FUZOKUワークシート

言語感覚を働かせることの有用性を生徒が感じるため，また意識的に言葉と関わる態度を育てるために，言葉の価値や実生活における有用感に気付かせるところから始めるため，本校では「FUZOKUワークシート」の作成と活用に取り組んできた。学校における授業のみでなく社会的な事象と自分自身の考えを交差させる場面を作ることで，より豊かな言語感覚を養うことにつながると考える。

新聞記事に対し，自分自身の意見や考えを外化し，それを他者と交流することで考えを深めることや広げると考える。また，FUZOKUワークシートを使い，１年では自分自身の気づきの発表，２年では他者の気づきに対しての気づき（感想・比較・疑問・意見・批判等）を小グループで考える，３年では２年生で培った力を用

いた上で，気づきの提示の仕方においての工夫，その場で質問や応答を通し全体で一つの事象に対する考えの深まりや広がりを促す交流を取り入れている。これらは帯単元として行っている。

（３）思考の可視化・ノート作り

生徒が気づいたことや考えたこと，理解したことなどを可視化することで情報の整理につながる。また生徒の記述の意識が高まるだけでなく教師が評価材として生徒の見取りを行う際にも有効である。生徒が記述することで考えが深まると実感できる工夫をさらに積み重ねていきたい。

可視化の具体として以下のような取り組みを行った。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○　トゥルミンモデル | …　論理構成の分析 | ○　三角ロジック | …　論理構成の分析 |
| ○　マインドマップ | …　思考の表面化 | ○　一枚ポートフォリオ | …　思考の変容の見取り |
| ○　マンダラート | …　発想の広がり | ○　学習感想の集積 | |

（４）交流形態の工夫

自分の考えを深めたり広げたりする一つの学習過程として「交流」を行う。これまでの学習過程の中でも小グループによる意見交換の有用性は周知されているところである。しかし，それが意見発表のみで終わってしまい，他者を承認する要素が強い。深みや広がりをもった交流とするため，ファシリテーション（facilitation：集団による知的相互作用を促進する働き）や国語科で積極的に取り入れてきたワールド・カフェなどの考えを用い，他者の意見や考えに対する発見の驚きや衝突（否定でなく吟味）を促すような効果的な交流の在り方について今後も実践に取り組みたい。

## ５．引用・参考文献


有本秀文　2010　ブッククラブ実践入門　明治図書

井上尚美　1989　言語論理教育入門　明治図書

井上尚美　2007　思考力育成への方略―メタ認知・自己学習・言語論理―〈増補版〉　明治図書

岩永正史　2000　言語論理教育の探究　井上尚美編　東京書籍

大西道雄　2009　国語教育指導用語辞典（第４版）　田近旬一・井上尚美編　教育出版

中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」　2016.12

中央教育審議会初等中等教育課程部会　国語ワーキンググループにおける取りまとめ　2016.5

文部科学省　中学校学習指導要領解説　国語編　2008

文部科学省　中学校学習指導要領解説　第１章　総説，第２章　国語科の目標及び内容　2017

山梨大学教育人間科学部附属中学校　研究紀要　2011 - 2015

山梨大学教育学部附属中学校　研究紀要　2016